各事業所やフロアーに掲示

永　寿　会

虹の通信　第３９号

２０２３年１０月２６日

～朝日新聞歌壇への投稿の一首に思うこと～

各新聞社の日曜版には必ず俳壇、歌壇のページが有ります。又出版される週刊誌や関係団体の雑誌などにも殆ど確保されていると思いますが、その役割と意味は何なのでしょうか？９月１０日（日）朝日歌壇に次のような投稿された一首がありました。

「どの家（や）にも死者が鴨居にゐ（い）た　昭和深閑として遠きカナカナ」

（浜松市、松井惠さん作品）

この一首はここ５年間で毎週朝日新聞の日曜日の投句欄を読む中、一番の秀歌だと思っています。

この歌にはその家族の歴史における深い闇と生活の痕跡があります。日本の古くからの民家の畳部屋には一丈ほどの高さに１５センチほどの幅木の板でぐるっと囲われており、衣服を衣紋掛けに通して懸けたり、写真や表彰状を飾ったりして利用する場所となっていました。（これを鴨居と言います）また、多くの家では曽祖父母や祖父母、父母の遺影や早世した親族や戦死者の先祖が見下ろしているのです。特に「昭和深閑として遠きカナカナ」の部分は多分太平洋戦争で命を落とした親や叔父の軍服姿の写真が目に浮かび、そして近くの里山や屋敷林にヒグラシが鳴く光景は心に染み入ります。さすがだなーと思い入るばかりです。

私は青春時代には、現代詩をよく読んでおりました。古くは中原中也、萩原朔太郎、そして祝婚歌で有名な吉野弘や黒田三郎をはじめ、吉本隆明、長田弘、谷川俊太郎の作品が好きでした。又草野心平が中心におられた「歴程グループ」の詩人達の作品も読んでおりましたが、グループの一員で集英社におられた及川均さんには高校時代に作品の添削もして頂いており、高校卒業する少し前に東京荻窪の自宅まで勇気を奮って会いに行き、食事をご馳走になったのも懐かしい思い出です。突然だったので、当日は娘さんが成人式用に和服を着付け中でした。

しかし、その後進学すると時代の様相も劇的に変わり、現実も動乱の日々でこうした波の中で、現代詩壇はその後、抽象的観念的様相を深め、興味を失いました。その代わり現代歌壇の方に興味が深まり、読みあさりは今でも続いておりますが、不思議なことに馬場あき子さん主宰するグループにより「かりん」と言う同人誌が発行されており、優れた歌を書いていた三枝昂之さんもおりました。法人の施設名が「かりん」と名付けられている事に対しても、何かの縁を感じます。

以　　上